
未来日記パラレル(「未来日記」二次創作)

ray

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来日記パラレル（「未来日記」一次創作）

【Zコード】

Z3915BA

【作者名】

ray

【あらすじ】

未来日記の一次です。

一次は初めてですが、お願いします m (—) m
パラレルなどといつちょまえに横文字なんぞ使っていますが、どちらかというと、もしも的なこうだつたらいいのに的な気持ちでやつてます。

かなりざつくりと言つと概ね原作準拠ですが、細々とした変更はその都度前書きにて提示したいと思います。

読んだよー的のとかよかつたよー的な感想など気軽に頂ければ
幸いでゞこます m (—) m
あと、何分至らぬ所しかゞこませぬので、他にもダメ出しも頂
ければ非常に嬉しいです m (—) m

p.i × i \他にて重複投稿予定

選択1（前書き）

活動報告で言っていた作品が行き詰まり、気分転換に進めていた
らいつの間にかこっちの方が一段落ついているという不始末、一体
どれほど転換していたのか。

本物語は原作2巻終わり寸前から開始で、それ以前は原作通りで
す。

春日野椿は、信者に取り押さえられた天野雪輝の唇に、自身のそれを重ねた。

そして、彼の閉ざされた唇の隙間を割つて舌を挿入した。

我妻由乃へ向けられた挑発的な眼差し。およそ愛し合う者どうじの行為からは酷く遠くかけ離れたキス。口腔内へ侵入した舌は、雪輝のものを一方的に犯した。

始終彼女のなすがままにされていた雪輝だが、彼には椿のその行為が、酷く自虐的なもののように感じられた。唇や舌の感触は酷く曖昧なのに、なぜかそれだけは確かだった。

椿が唇を離す。雪輝の下唇と椿の舌を、だらしなくたわんだ唾液が繋ぐ。その間も視線は由乃を捉えたまま。

信者たちに捕えられたままの状態の由乃は、驚愕に目を限界まで見開いた。体は小刻みに震えている。

ザザーッ。

タイミングを見計らつたように日記から未来が書き換わる音がした。椿はその音をはつきりと聞いた。

「さて、これでよつやく DEAD END も消え……」

視線を自身の日記に移す。日記が紡ぐ新たな未来は。

「え……？」

彼女の日記には依然、DEAD END の文字が。

「そんな……馬鹿な……。未来は確かに書き換わったはずなのに……！」

焦りのままに声を荒げる彼女は、日記の詳細を手で追つた。

そして、我が手を疑つた。

「これは、一体どうして……！？」

顔を上げると、椿はなぜか雪輝を見た。

しかし、この場で彼女がそれ以上日記の詳細を考察する時間はなかつた。

「ユッキーをおお……汚すなあああああああ……！」

信者達の拘束を振り払つた由乃是、椿に向かつて弾丸のような速度で駆けた。

「馬鹿な！ 大の大人が一人がかりで組み伏せてたのよ……！」

椿の焦りも意に介さず。由乃是速度を殺すことなく、近くにいた

信者から斧を奪い取り、勢いそのままに大きく振りかぶり椿に切りかかつた。

「死つ、ねええつつ……！」

マズイっ！　日記を守らないと……！

無音だった。何もかもが。

それを田の当たりにした者たちや、それを取り囲む環境の一切が停止したような、無音。

雪輝。

信者達。

由乃。

そして、当の椿さえも。

ボト。

無音の中に微かな音が咲いた。まるで何かの[冗談]のようなアクセントだった。

音のした方を、まるでこの世のものではないといつよつな風に見つめる椿。

床に転がる自分の右手首。

それを見て初めて、自分の手が由乃に切り落とされたのだということを理解した。

痛みは、それに遅れて訪れる。

「あああああああああッ！…腕が…腕があああああああーーーーーーーーーー！」

無音は断末魔の叫びで破られた。

滑らかな切断面からは血がとめどなく流れ出てくる。

由乃はそのまま雪輝へ向き直ると乱暴に斧を振り、信者達を彼から引き剥がす。

そして自分の未来日記を預けると、雪輝を渡り廊下から庭へ突き落とした。

「私の日記を見ればユッキーはきっと大丈夫だから。逃げてー。」

それを最後に、今度こそ由乃は信者達に取り押さえられた。

「我妻は捕まり、雪輝は逃亡」……。俺たちもいざれ見つかる。そして、頼みの応援も絶賛足止め中か。こりや全滅かな」

屋根瓦の上に身を潜めて、雪輝たちの動向を追う来須とみねね。二人は互いの腕を一つの手錠で繋いでいる。

スプリンクラーを作動させた来須はそのまま地下牢へと潜り込み、今まさにそこから脱出しようとしている雨流みねねと鉢合せた。先述の方法で彼女を拘束した来須は、信者の目を避けて、二人での屋根の上に辿り着いた。

「全滅かな、じゃないわよ！ セツナと手錠を外しなさいよ！ 刑事と共に倒れなんて無駄死にもいいところだわっ！」

12ヶ月から解放され、ようやくこの忌々しい宗教施設からおさらばできると思った矢先に、今度は4ヶ月に付き合わされる羽目になって、片手が不自由な状態でこんな屋根瓦の上にまで登らされたかと思いきや、4ヶ月の全滅発言である。9ヶ月の苛立ちもさもありなん。

〔冗談じゃねえ。んなこと勝手に決めつけんな。あたしにはこんな状況にあつらえ向きな日記があんのよ。滅ぶんならてめえ一人で滅びな。

だから手錠を外せってんだ。

「いいだろ？ 交換条件付きなら外してもいいぜ。」

みねねの怒りも無視して、少し考えた後に来須はそう言った。

……え？

「？ 交換条件！？」

確かに手錠を外させたいのでそりやつて言ったのだが、条件付きとはいえ易々とそんなことを言つてのける来須を気持ち悪く感じ、みねねは訝しがるような、彼の真意を探るうとするような微妙な表情を浮かべた。

そして来須が、その真意ともいえる条件を提示した。

「んっ、ああああ……」

お田方教本部内の一室。椿はそこで手当てを受けていた。もっとも、手当と言つても腕が切断されているとなれば、手元にある医療器具だけでは根本的な治療は到底望めない。信者の中に医学に明るい者が居たというのがせめてもの救いである。

切断された右手は、この部屋にはなかつた。

由乃是椿たちのいる一室に至る廊下にて大勢の信者によって拘束されてゐる。先ほどのよつと振りほどかれるという可能性は、ほとんどないと思われる。

「見える」「世界」と「見えない」「世界」。

いつもだ……。

私を苦しめる者はいつも「見えない」世界からやつて来る。

たとえ今のような状態であつても、長い間に亘つて行われてきた儀式のせいとそれ以外の時に男性信者に触れられるというのは、椿にはどうしても受け入れられなかつた。

「 方様 」

件の男性信者に指示を仰ぎながら、一通りの処置を施し終えた信者、美神愛が呼んだ。

しかし、椿は痛みに耐えるよつとして歯を強く噛みしめながら、自身の忌まわしき過去を思つていたために気付かなかつた。

「……お田方様っ！？ 失血がひどすぎます。これじゃ命に……」

語氣を強めた愛の一回目の呼びかけで、椿は今、そして未来を取り返した。

止血はほぼ完成したが、それまでに失った血液はかなりの量になる。

「…………つむやいわね…………、これぐりこマツ…………へ、平氣、よ…………」

真剣に身を案じる愛の言葉にも彼女は意を介さない。

言葉にした所で我が身を取り繕つことができないところのが現状だ。

体はガクガクと震え、呼吸は荒く、顔色は蒼白。いつものようなきちんとした正座ではなく、それを崩したような恰好で左手を置に着いて、どうにか意識を保つていてるといった様子だ。俯いた顔、長い髪の間から、時折苦悶に必死で耐えるような表情が覗く。

誰がどう見ても平氣とは思えない。

それでも、見え見えの虚勢を張つてでも、やり遂げなければならぬことが、今の椿にはあるのだ。

父と母が死んでから。

私はずっと教団のなぐさみになつてきただ。私はその苦痛に、耐えてきたのだから。

あと、少し。あと少しだから……。

汗が、滴り落ちる。意識が揺らぐ。

このまま気を失えば、一度と田を覚ますことはない。そんな予感がある。

だから、何としても意識だけは保たなければならぬ。

それ。

「んな所で DEAD ENDになるわけにはいかない。

日記通りに DEAD ENDを迎なればならぬ。

愛と、彼女と一緒に手当に携わった富代お鈴という信者の力を借りて何とか立ち上がった椿は、途切れ途切れながらも、必死で言葉を紡いだ。

「今より……神託を、告げます」

千里眼日記のこととは信者たちは既に把握している。だから、彼らは彼女の言つ神託などという言葉はまやかしであるということも知つていて。元よりそんな力が備わっていないことなど、自分が一番理解している。

しかし、予断を許さないといつ状況にあるにも拘らず あるからこそ、とも言える 放たれた懸命のそれには、不恰好ながらも、自身を奮い立たせようとする強い矜持が込められている。

椿は千里眼の巫女として、春日野椿本人に対してその言葉を投げかけたのだ。

選択2（前書き）

原作御目方編 + 程度にエロティックな部分が出てきます。
グロはないと思います。

お田方教本部。本堂の床下に雪輝は身を潜めていた。由乃に言われるままに信者達から逃れ、ここに辿り着いた。

すぐそばで、信者達が自分を探している気配を嫌と言つ程感じたが、幸いなことにしばらくなと彼らは遠ざかって行つた。

ひとまずは難をやり過げしたとはいえ、再び近くまでやつて来るかもしない。由乃から受け取つた雪輝日記がそれを予知するまでは、とりあえず地面に仰向けに寝転がつて心身を落ち着かせた。

椿さんに裏切られた。何で？ 悪い人には見えなかつたのに。結局由乃が正しかつたんだ。由乃はずっと僕を守りつとしてたんだ。

これまでの事を思い出した。色々なことがあつた。その結果が、自然と瞳から零れ落ちた。

雪輝は涙ながらに由乃の日記を見つめる。

雪輝日記。その方が示すように彼女の日記には彼の未来が逐一表示されてゐる。

そこには雪輝自身の未来の他に、由乃の彼への思いが添えられてゐる。

“コッキーと一緒にいる事になる。

こんな日が来るなんて夢みたい。

”

“コッキーの手が一瞬触れる

”

ど、どうしよう手をつなげちゃおうか。

由乃は実際異常なかもしねない。

ストーカー癖。女子中学生とはとても考えられない身体能力。

それに、彼女の家。あのふすまの向こう。

でも、それ以上に確かなのは……。

画面をスクロールさせていた、その手が止まる。

“どうしよう大好きな気持ちが止まらない。
好きよコッキー。”

そこには、そう書かれていた。

僕の事が好きで、守ろうとしてくれたって事だ！

「どうやるんだよ」

自分で聞いかける。ほとんど答えは出していたが、何かを選ぶといつひとは同時に何かを捨てるといつことでもある。

一方を選べば、必ずもう一方と対峙することになるだろ。そつなると、相手を殺すことになるのかもしないのだ。逆だって考えられる。

殺すのも、殺されるのも嫌。

それが結論を出させなくしている。

「誰も選ばないまま逃げちやうのかよ僕はあ

自分で吐いた情けない言葉で更に情けなくなりながらも、涙目をぐしごしと擦つて上半身を起こした。

そして、何といつともなく辺りを見渡すと、礎石とそれを囲つようにしてできた小やく盛り上がった土の隙間に、何かが挟まつてこのに気が付いた。

近くまで這つて行も、雪輝はそれを拾い上げた。

それが何かを確認している途中で、どこかからスピーカー越しの声が聞こえてきた。

椿の”神託”は終わり、由乃是信者たちに弓をやり戻すようにして部屋の中へ入ってきた。

「お持しあました」

椿は由乃を警戒しながら、お鈴が持ってきた連絡用のマイクを受け取る。

依然表情は険しく、足元もふらついてはいるが、それでも”神託”の前後では、そばにいた信者達には随分と違つ印象を与えている。

「何を始める気！？」

険のある田で椿を打ち据える由乃。

「本当は乗り気じゃない、なんて言つても……つ、信じてはもらえない、でしょ！ナビ……」

そう言つと、怪訝な表情を浮かべる由乃を尻田に、マイクを通してどこのスピーカーの向こうにいるであるつ雪輝へ向かって声を飛ばした。

「……私と同じ田に、ニッ！……あうがいいわ

椿は信者に手配せをした。

それを確認した信者達は羽交い絞めにされた由乃の服を破いた。

「あ

中学生としてはかなり発育の良い由乃の乳房が露わになった。

直感的にそこに原因不明の敗北感を感じながらも、瞬時にそれを払拭しながら椿はマイクに言葉を乗せる。

「押さえて順番、に、犯しなさい」

「穴は一つじゃないんだから同時にでもいいわよ」なんてことを言おうかとも一瞬思つたが、やめた。いくら演出とはいえますがにそんな馬鹿なことを言つ趣味も余裕もどこにもない。

そう。これは、演出。

DEAD ENDに至るための。

「聞こえてるかしら、雪輝君。もつすぐなが傷物になっちゃつわよ?」

雪輝は床下でそれを聞いていた。マイクが、椿の声の後ろから発せられる由乃の声を拾つ。

「やー あつ! ヤダツ! ヤダよつ! 私の最初はコツキーつて決めてるんだからつー」

「助けたければ出てきなさい」

まるで計算されたかのようなタイミングでの椿の一聲。

由乃! !

ぶるぶると震えながらも由乃の身を案じる。しかし。

今出でいけばきっと殺される。

椿が待ち構えている場所にはきっと大勢の信者が居る。普通に考えれば未来日記に頼るまでもなく、数で圧倒される。

自分にREAD ENDフラグが立つていないとはいえ、どう抗つても逆転できるとは思えない。

答えはもうそこまで出でてゐるのに、恐怖に囚われて決定打が打ち出せない。

でも、僕は由乃を見殺しにして……。

それでいいのか……！？

それ以降、スピーカーからは何も聞こえなくなつた。

由乃が僕を呼んでいる。

昨日、遊園地で由乃と観覧車に乗った。縁起でもない事だが、その時の情景や由乃の言葉が、まるで走馬灯のように突然浮かび上がつてくる。

観覧車の中、二人きり。

ビルの向こうに沈んでいく夕陽。空はオレンジ色。観覧車の稼動音や「ンダラ」の微かな揺れと、特有の停滞した空気の匂い。

何もかもが心地よかつた。

曲乃は僕の額に、静かにキスをした。

この時、二人の乗つているゴンドラがもうすぐ一番高い所にくるところだったのを、僕はぼんやりと覚えていた。

顔を上げた由乃はとても恥ずかしそうにしている。僕も何だか恥ずかしくなつてきて間が持たなくなつたから、「何でおでこなのさ…？」なんてことが自然と口をついて出た。実際前みたいに舌と舌を絡ませるのがよかつた。この子と一緒に、またあの感覚を味わいたかった。

すると由乃は言った。

「次は、

コッキーからしてね。

私はいつだつてコッキーを守るから。

その「褒美」

はにかみながら。でも、とても幸せそつこ。

雪輝は駆けだした。

選択2（後書き）

何だらう。起承転結で言えば承になるんだと思います。
章の切り方で悩んでいたのですが、棚ぼた的にうまく型にはまつ
てくれたのではないかという、自贊できないやつたつた感が少しあ
ります。

あと、敗北感とか穴などの余りにも空氣の読めない描[写]は、敢え
て焚火にダイブするような気持ちでやつてしましました。

次で一波乱あると思います。いつもより少しばかり長いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3915ba/>

未来日記パラレル(「未来日記」二次創作)

2012年1月10日22時52分発行